

# 漢字音の長音教材

-中国語母語話者と非母語話者を対象に-

黒沢晶子（山形大学）

akuros@kdw.kj.yamagata-u.ac.jp

## 【要約】

本研究は、日本語の漢字を学ぶ学習者にとって共通の問題点である、長音を含む字音について、中国語母語話者とそれ以外の学習者それぞれの視点に立った教材開発を目的としている。日本語の長音は中国語字音からの類推がかなりの程度可能であり、両字音の対照によって、効果的な学習を可能にすることができる。一方、歴史的音変化によって対応関係がわからなくなっているものについては、非中国語母語話者と共通するアプローチとして、音符となる同形要素から字音を類推することが有効である。この二つの方法を組み合わせることによって、漢字に対し異なる基盤を持ついずれの学習者にも寄与できる教材を作成している。本稿では、その概要を述べ、課題について論じる。

## 1. はじめに

日本語の学習者に漢字音で難しいのは何か問うと、主に促音の有無・長短・清濁の三つの答えが返ってくる。促音、長短に関する誤用には、次のようなものが見られる<sup>1</sup>。

1 実現：じげん、じっげん、博物館：はつぶつかん、多発：たっぱつ、物体：ぶつたい

2 生活：せかつ、旅行：りょうこう、駐車場：ちゅうしゃじよ、散歩：さんぽう

促音と長音は、多くの言語の母語話者にとって知覚の困難な音であり（日本語教育学会 2005）、これらを含む（または含まない）漢字音の習得の難しさもこれに起因している。

1 に関わる入声音は、現代中国語の標準語では入声韻尾-p、-t、-k が失われているため、標準語字音からの手がかりは限られている<sup>2</sup>（黒沢 2011a, b）。このため、作成した教材では、方言字音との対照や音符からの類推を手立てとして活用した（黒沢 2015a）。

それに対し、2 の日本語の長音は、中国語の標準語字音（以下、中国語字音）との対応関係から、かなりの程度、類推できる。かつ、例外に見えるものの3分の1以上が実は入声音由来の字である（4. 4、5 参照）。中国語母語話者にとって強みとなるべき中日字音の対応であるが、学習者にはあまり知られていない。開発している教材のひとつ（教材1：中国語母語話者対象）は、こうした

<sup>1</sup> 誤用例は、筆者が担当する初級～上級の授業等の筆記試験、作文、音読で得られたものから採った。学習者の母語は、中国語、インドネシア語、マレー語、スペイン語、仏語、独語、英語である。

<sup>2</sup> 第2声かつ無気阻害音（ピンインで b, d, g, j, z, zh）で始まる字音はほとんどが入声である。筆者の調査では、常用漢字の音読字に78字あるこれらの字のうち、2字（鼻、値）を除き、当てはまる（白、敵、読、国；別、達、結など）。なお、日本語で「値」が除外されるのは、「値」には去声と入声、二つの出自があり、日本語は「置」と同様に去声、中国語は「直」と同じく入声由来の字音であるためである。歴史的には「北京音で2声になるのは、平声と入声だけであるが、平声ならば必ず有気音になっているはずだから、無気音のものは入声ということになる。」（中村 2005:20）と説明される。この手がかりによって見分けられる76字は、常用漢字の入声字390字中の20%弱に当たるが、それ以外の314字には、このような現代中国語字音からの判別法がない。

A 日中字音の対照 (例：方、能、東、行 -ng で終わる →長音)

によって、効果的な学習を可能にすることを意図している。同時に、明快な対応関係から外れる部分については、入声音の学習と同じように、

B 音符からの類推を活かす教材 (例：zhi 指・旨→[音符] 旨→シ、制・製→[音符] 制→セイ) を、並行して作成している。一方、非中国語母語の学習者には、教材 1 B 同様、音符を活用するが、中国語字音からでなく、日本語字音が似ている字を音符でグループ分けする教材を作った (教材 2)。

この長音教材作成の基礎として、漢字音調査 (黒沢 2015b) と同形要素から音符を見つけ入声音かどうかを類推する教材 (黒沢 2014、2015a) を用いた<sup>3</sup>。

## 2. 漢字音調査 (日本語長音と中国語字音との対応) の結果

図 1 に日本語の長音から見た中国語字音、表 1 に例、図 2 と図 3 に中国語から見た日本語の長音 (黒沢 2015b) の分布を示す (単位：字数)。日本語の字音は、常用漢字音訓表で最初に掲げられた字音を用い、中国語字音は異読がある場合は依藤他編 (2003) でより重要度が高いとされる意味用法の読みを採り、ピンインで表示した。図 1 の凡例、o、u、ng は韻尾を示す。韻尾 o の字は ao と iao、u は ou と iu、ng は、ang、eng、iang、ing、iong、ong、uang、ueng の各韻母を持つ字を指す。

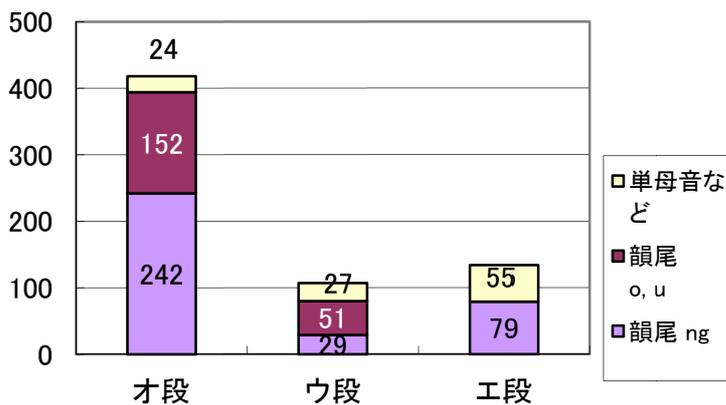


表 1 オ段長音の例

韻母	字	中	日
ang	方	fang1	ほう
eng	能	neng2	のう
ong	東	dong1	とう
ing	行	xing2	こう
ao	考	kao3	こう
iao	交	jiao1	こう
ou	構	gou4	こう

図 1 日本語の長音から見た中国語字音

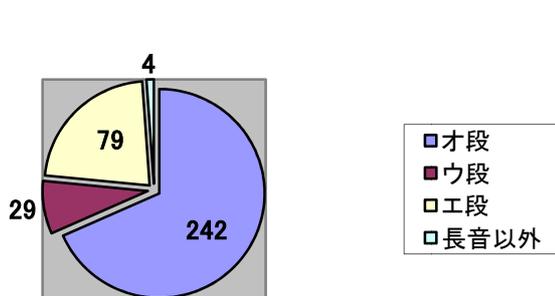


図 2 中国語-ng から見た日本語の長音

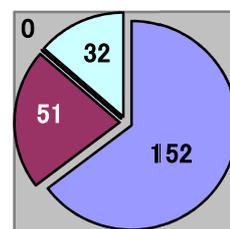


図 3 中国語-o, -u から見た日本語の長音

<sup>3</sup> 日本語教育を視野に入れた日中漢字音対照の先行研究には、古藤 (1987)、薛 (2013) がある。古藤 (1987) は旧常用漢字、薛 (2013) は 2010 年の新常用漢字のうち、日中とも字音が一つだけのものを対象としている。本研究では、学習上の重要性を考え、複数の字音を持つ字も含めた。

図1から、日本語の長音は中国語で特定の韻尾（ng 350字、o・u 203字）で終わる字に集中している（659字中の553字、84%）ことがわかる。また、図2は、中国語から見て、ngで終わる字は4字を除き、すべて長音になること、図3は、韻母ao、iao、iu、ouで終わる字は203字が長音、32字が長音以外に対応することを示している。表1に才段長音の例を掲げた。このように、長音になるかどうかは、中国語字音からかなりの部分が予測可能である。以下、まず3で、教材に用いた漢字と語例の選び方を、次に4で中日字音の対応を活かした教材A、さらに5で、このような対応のない字の教材Bの例を挙げる。そして、6で非中国語母語話者対象の教材でのアプローチを取り上げ、最後に7で試用の結果と課題について述べる。

### 3. 試用教材に用いた漢字と語例のレベル

教材に用いた漢字と語例は、どちらも日本語能力試験N2N3レベル（旧2級）以下のものが大半を占める（表2、表3）。教材1Aの異なり81字、1Bの各音符グループ代表字25字、教材2の各音符グループ代表字61字で、9割以上が徳弘（2008）の漢字順位1000位までのものである。また、9割以上の語例に徳弘（2008）の学習指標値0～10のうち、9以上のものを用いた。漢字順位と学習指標値は、天野・近藤（1999・2000）の漢字と単語の頻度・親密度調査の結果を統合したものである（徳弘2005）。

表2：教材に使用した漢字のレベル（代表字）

教材	学習者の母語	N2N3以下	漢字順位～1000位	字数
1	中国語	86%	90%	106
2	中国語以外	92%	93%	61

表3：教材に使用した語例の語彙レベル

教材	学習者の母語	N2N3以下	学習指標値9以上
1	中国語	91%	94%
2	中国語以外	87%	92%

練習に用いた漢字の異なり字数は、A・B合わせて教材1は152字、教材2は137字（各音符グループの代表字以外の字を含む。表9参照）である。音符教材では、同じカテゴリーの漢字を1音符当たり2～3字学ぶ。なお、事後テストには、主にN1レベルおよび級外の字と語例を用いた。（7参照）

## 4. 教材1A：中国語母語話者（N1・N2）対象

### 4.1 中国語の字音から類推する

教材1の対象レベルはN1・N2とする。次のような前置きに続いて、4.2以下のように帰納的に中日の対応が発見できるようにした。表4-1の空欄に学習者が記入した結果（青字部分）が表4-2である。

日本語の字音は、古い中国の字音（主に隋唐音）を日本語の音韻体系に合わせて単純化したものです。その後、中国語では、かなり字音が変化しましたが、日本語に隋唐時代の古い音が残っているものもあります。一方、日本語側の事情で変わっていった字音もあります。こうしたことの結果、現代中国語の字音と現代日本語の字音には、きれいに対応している部分もあれば、元の対応関係がわからなくなっている部分もあります。

1回目は、日本語で長音となっているもののうち、中国語との対応関係がわかりやすいものを採り上げます。この対応関係を知れば、8～9割は中国語音から日本語音の長短を類推することができます。

#### 4. 2 韻母 ang、iang、uang を持つ字

中国語で韻母 [ ] [ ] [ ] を持つ字は、日本語の ( ) 段 { 短音・長音 } に対応する。

次の字の中国語と日本語の読みを書いてください。中国語の読みは、ピンインでも注音符号でもいいです。中国語と日本語の字音とは、どのように対応していますか。

表 4-1: 韻母 [ ] [ ] [ ] を持つ字 (一部)

	字	中国語	日本語	語例
1	方			方法
2	当			本当
3	堂			食堂
4	両			両親

	字	中国語	日本語	語例
5	長			社長
6	場			工場
7	上			上手
8	状			状態

学習者が空欄を埋めると、次のようになる。(中国語の読みはピンインで示した)

中国語で 韻母 [ ang ] [ iang ] [ uang ] を持つ字は、日本語の ( オ ) 段 { 短音・長音 } に対応する。

表 4-2: 韻母 [ ang ] [ iang ] [ uang ] を持つ字 (一部)

	字	中国語	日本語	語例
1	方	fang1	ほう	方法
2	当	dang1	とう	本当
3	堂	tang2	どう	食堂
4	両	liang3	りょう	両親

	字	中国語	日本語	語例
5	長	chang2	ちょう	社長
6	場	chang3	じょう	工場
7	上	shang4	じょう	上手
8	状	zhuang4	じょう	状態

#### 4. 3 他の韻尾 ng を持つ字

続いて、他の韻尾 ng の字についても、ang 系と同様に、どの段の長音との対応かを確認する。実際には分割して行うが、ここでは、まとめて表 5 に対応例を示す。青字、赤字部分が学習者が記入する欄である。なお、これらの字の一部は、日本語で二つ以上の字音を持つが、そのことにも注意を喚起する。特に、韻母 eng、iong、ing 対応字には、「正、兄、行、明、定、経」のように、オ段拗長音とエ段直長音があるという類型が見られる(日本語字音の赤字箇所参照)。

表5 韻母 [ eng ] [ ong ] [ iong ] [ ing ]を持つ字 (一部)

	字	中国語	日本語	語例	段
1	豊	feng1	ほう	豊富	オ
2	能	neng2	のう	能力	オ
3	増	zeng1	ぞう	増加	オ
4	正	zheng1	しょう	正月	オ
5	東	dong1	とう	東京	オ
6	動	dong4	どう	動物	オ
7	統	tong3	とう	伝統	オ
8	同	tong2	どう	同意	オ
9	兄	xiong1	きょう	兄弟	オ
10	応	ying1	おう	応援	オ
11	行	xing2	ぎょう	行事	オ
12	明	ming2	みょう	明日	オ
13	定	ding4	じょう	勘定	オ
14	経	jing1	きょう	お経	オ

	字	中国語	日本語	語例	段
15	風	feng1	ふう	台風	ウ
16	冷	leng3	れい	冷蔵庫	エ
17	程	cheng2	てい	程度	エ
18	正	zheng1	せい	訂正	エ
19	中	zhong1	ちゅう	中心	ウ
20	重	zhong4	じゅう	重要	ウ
21	通	tong1	つう	交通	ウ
22	栄	rong2	えい	栄養	エ
23	兄	xiong1	けい	父兄	エ
24	映	ying4	えい	映画	エ
25	行	xing2	こう	銀行	エ
26	明	ming2	めい	説明	エ
27	定	ding4	てい	予定	エ
28	経	jing1	けい	経済	エ

ここまで表4と表5の例を含み52字について行った観察は、次のように、まとめられる。

中国語で韻尾 [ ng ] を持つ字は、日本語の { 短音・長音 } に対応する。

ただし、図2に示したように長音とならない例外が4字ある。「瓶 びん、夢 む、種 しゅ、腫 しゅ」である。このうち「瓶」は唐宋音「びん」が常用漢字音に採られたが、漢音に「へい」を持つ。

#### 4. 4 韻母に ao、iao、ou、iu を持つ字

次に、母音韻尾 o、u を持つ字の字音を表6のような形で確かめると、以下のことがわかる。

韻母 [ ao ] [ iao ] を持つ字は、主に、日本語の ( オ ) 段の { 短音・長音 } に対応する。

韻母 [ ou ] を持つ字は、主に、日本語の ( オ ) 段と ( ウ ) 段の { 短音・長音 } に、

韻母 [ iu ] を持つ字は、主に、日本語の ( ウ ) 段の { 短音・長音 } に対応する。

ただし、表6に赤字で示すように、一部に短音を含む。表中、赤字は長音でない字音を示す。「由」のように、常用漢字音訓中に長短両方の音を持つものもあれば、「保」のように音訓表にない長音「ほう」を持つものもある(例：保元の乱)

表6：韻母 [ ao ] [ iao ] [ ou ] [ iu ]を持つ字（一部）

	字	中国語	日本語	語例	段
1	高	gao1	こう	高校	オ
2	号	hao4	ごう	信号	オ
3	考	kao3	こう	参考	オ
4	老	lao3	ろう	老人	オ
5	構	gou4	こう	構造	オ
6	豆	dou4	とう	豆腐	オ
7	留	liu2	りゅう	留学	ウ
8	由	you2	ゆう	理由	ウ

	字	中国語	日本語	語例	段
9	少	shao4	しょう	減少	オ
10	交	jiao1	こう	交流	オ
11	教	jiao1	きょう	教育	オ
12	保	bao3	ほ	保存	オ
13	収	shou1	しゅう	収入	ウ
14	手	shou3	しゅ	選手	ウ
15	休	xiu1	きゅう	連休	ウ
16	由	you2	ゆ	由来	ウ

ここまで表6の例を含み38字について行った観察は、次のように、まとめられる。

中国語で 母音韻尾 [ o ]、[ u ] を持つ字は、主として日本語の { 短音・**長音** } に対応する。韻母 ao、iao、ou、iu の字は常用漢字中235字あり、203字が長音（入声 p の「凹おう」を1字含む）、19字が短音である。さらに長音でも短音でもないものが13字ある。その13字は入声音に由来する字で、2拍目がクで終わるが、それは中国語字音からは見分けがつかない。表7はピンインが同じ入声と非入声の字の例を並べ、学習者が日本語の字音を書いて、両者が対照できるようにしたものである。入声の字音を赤字、非入声の字音を青字で示す。なお、字の右側の数字は声調を表す。教材では、ここで、隋唐音にあった k や t などの入声韻尾が元の時代には消失したが、広東語、閩南語等の方言や日本語、韓国語などには残っているという歴史的経緯を説明している<sup>4</sup>。

表7：入声字（対応の例外）と非入声字

	中国語	字	日本語	字	日本語	字	日本語	字	日本語
1	zhao	着 2	ちやく	朝 1	ちょう	招 1	しょう	照 4	しょう
2	liu	六 4	ろく	陸 4	りく	留 2	りゅう	流 2	りゅう

### 5. 教材1B：中国語母語話者対象—同形要素（音符）から類推する

3で見たように、日本語で長音かどうかは、大部分、中国語の韻尾から類推できる。だが、図1に示したように、長音になる字の一部（106字）は韻尾 ng、o、u を持つ字以外と対応している。そのうち、3分の1以上が入声 p 出自（例：納、十、答）だが、日本語内部の音変化によってできた長音であり、残りのうち46字は「計、例、閉」のように日本語でエ段長音、中国語で韻母 i で終わる字である。

この無韻尾の、i で終わる字は、常用漢字の音読字のうち305字、約14%を占めるが、日本語の字音との対応関係は、かなり複雑である（表8）。日本語の字音は、イ、キ、シのようなイ段短音が最も多く、140字に上るが、それ以外は、長音、連母音、2拍目がチ・ツ・キ・クで終わるものなど、規則的とは言えない対応を見せている。

<sup>4</sup> 入声音教材については、黒沢（2011a、2013、2015）参照。

表 8：中国語字音 -i 305 字と日本語字音の対応

	日本語	字数	字音例	字例
1	イ段短音	140	イ キ ギ シ ジ チ ニ ヒ ビ リ	衣 記 議 仕 時 知 尼 比 鼻 理
2	エ段長音	46	ケイ ゲイ セイ テイ デイ ヘイ ベイ メイ レイ	計 芸 制 低 泥 閉 米 迷 礼
3	aイ連母音	11	サイ ザイ タイ ダイ	際 剂 滞 第
4	入声 p ウ段長音	12	キュウ シュウ ジュウ リュウ	級 集 十 粒
5	入声 p-ツ	3	シツ リツ	湿 立
6	入声 t-チ・ツ	24	イチ シチ シツ ジツ チツ ニチ ヒツ ミツ リツ	一 七 疾 実 秩 日 必 密 慄
7	入声 k-キ・ク	64	オク ゲキ シキ ショク セキ テキ ヘキ ヤク レキ	億 激 識 食 積 適 壁 訳 歴
8	その他	5	セン リン コ ゴ ゼ	洗 厘 己 碁 是

例えば、リ（理）、レイ（礼）、リュウ（粒）、リツ（立）、レキ（歴）、これらはすべて標準語で li となる。その原因は中国語字音の歴史的変化にある。隋唐音では「理」だけが i、ほかは、それぞれ iei、p、t、k で終わる字だったが、元代の韻書『中原音韻』では、一様に li となっているのである。

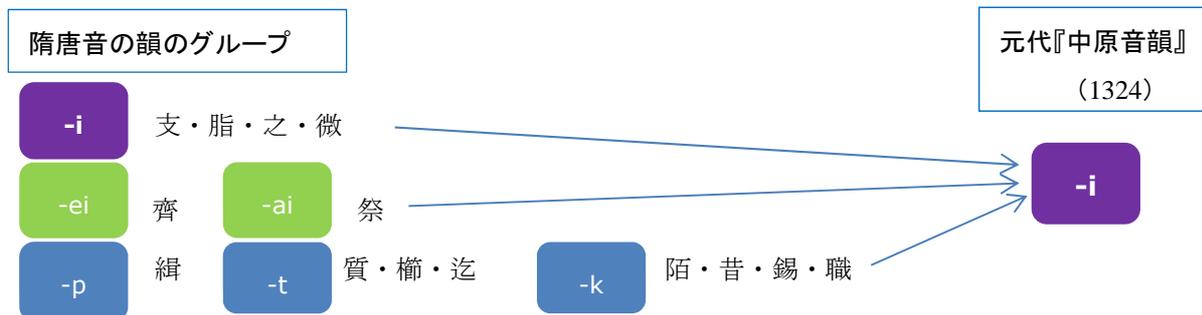


図 4：中国語における字音の歴史的変化

図 4 は、こうした変化を一般化して表したものである<sup>5</sup>。矢印の左側にあるのは、中古音の韻書『広韻』（1008）に記された字音（その韻の再構音）とそれに属す韻のグループで、『広韻』の字音は隋唐音を反映していると言われる。その隋唐音が日本語に写され、現代語で、表 8 の字音となっている。表 8 の 1（イ段短音）の字が本来中国語でも韻母 i だったものである。だが、中国語は、元代の韻書『中原音韻』（1324）に見られる字音が現代語字音の基礎となっており、現在の日本語字音との違いの原因となっている<sup>6</sup>。

対応関係が複雑に見えるものをどう扱うかの例として、図 5 に di を挙げる。

<sup>5</sup> こうした字音の歴史的変化と日本語字音の関係については、平山（1967）、藤堂（1980a, b）、高松（1982）、沼本（1986）、佐藤（2011）、中澤（2011）など、日本語に存在しなかった長音が生まれた過程については橋本（1936/1950）を参照。

<sup>6</sup> 『広韻』『中原音韻』の字音は<韻典網>による。<韻典網>の『広韻』字音は『宋本 広韻データ』に基づいている。



図 5 : 対応関係が複雑に見える例 di

中国語母語話者がこのような字の日本語字音を類推するには、中国語の字音とは別のヒントが必要だろう。漢字の構成要素で、音を担当する部分（音符）を見つけることは、そのヒントになる。図 5 の di の場合、同形要素を探すと、それが音符になっていて、図 6 に      で囲んだ字のように、音符ごとにグループ化できるものがある。



図 6 : 音符によるグループ分け di

教材では、上の史的变化について説明すると同時に、中国語で同じ発音（声調以外）の字をまとめてある。学習者は同形要素を抜き出し、グループ分けする作業を行う。その同形要素が音符として働いており、グループ内の字音に共通性があることを認識するのが目的である。（以下、（ ）内が音符）

例 1 : zhi 指・旨（旨）、製・制（制）、値・置（直 a）、直・植（直 b）、職・織（致）

例 2 : di 低・底・邸（氏）、帝・締（帝）、弟・第（弟）、敵・滴（商）

練習では、語例を挙げ字音を想起しやすいようにしている。

例 1 の語例：指定、要旨、製造、制作、価値、設置、直接、植物、職業、組織

韻母 i に次いで字数が多い、韻母 u を持つ字は常用漢字音読字中に 188 字ある。その内訳は、才段短音 74、ウ段短音 38、ア段短音 1；ウ段長音 9（うち入声 p 由来 1）；～ツ（入声 t）11、～ク（入声 k）55 である。韻母 u を持つ字についても、同様に音符を見つけて読みの共通性を確認する練習をする。

例 3 : zhu/shu/su 注・駐（主）、殊・朱・珠（朱）、束・速（束）、塾・熟（孰）、述・術（朮）

## 6. 教材 2 : 非中国語母語話者 (N2) 対象—同形要素（音符）から類推する

母語が中国語でない学習者対象の教材では、表 9 のように日本語字音で似たものをまとめている。同形要素を抜き出し、日本語字音が共通することを発見する学習法は、5 の中国語母語話者と同じである。表 9 に示した例のうち、「古、高、交、工、構」が各音符グループの代表字である。音符を見つければ、例えば「湖」や「枯」、「効」、「郊」の字音が未習であっても、長音か、そうでないか判断し、さらに、その字音までも類推することができるようになる。

表 9：同形要素を音符として持つ字のグループと字音（一部）

	同形要素	字	字音	語例
1	古	古	こ	古代
2	古	故	こ	事故
3	古	固	こ	固定
4	高	高	こう	高校
5	高	稿	こう	原稿
6	交	交	こう	交通

	同形要素	字	字音	語例
7	交	校	こう	学校
8	工	工	こう	工場
9	工	攻	こう	専攻
10	工	功	こう	成功
11	菁	構	こう	構造
12	菁	講	こう	講義

表 1 の字を含むオ段音の学習のまとめは、次のようである。

同形要素[ 古 ]を持つ字は、( オ ) 段 {短音・長音}「こ」に対応する。

同形要素[ 高 ]、[ 交 ]、[ 工 ]、[ 菁 ]を持つ字は、  
( オ ) 段 {短音・長音} 「こう」に対応する。

なお、教材 2 の対象には、韓国語母語話者も含めた。現在、韓国では、漢字が日常生活でほとんど使われておらず、漢字を見たとき、ただちに母語の字音を想起するとは言えないためである。ただ、韓日の漢字音には中国語同様の、あるいは、それ以上の対応関係があるので、上記の練習の傍ら、補助的に母語の字音との対照も行う。例えば、表 9 では、韓国語で ng で終わるもの（工・攻・功・講：コウ）は長音になるが、o で終わるものは長短あり（古、故、固：コ；高・稿、交・校：コウ）、韓国語字音からは見分けられないことを確かめる。

また、例 1 は、韓国語で k で終わる字は日本語で 2 拍目がキ（積・責・績）またはク（直・植）であり、韓国語で母音終わりの字（制・製、値・置）と区別できる。これは韓日ともに入声音が残っているからであり、中国語にない利点である。一方、例 2 は入声 p の字（級・吸）を含むが、日本語でウ段長音になってしまったこれらは、韓国語では今も p で終わる音である。

例 1：セイ 制・製（制）、セキ 積・責・績（責）、チ 値・置（直 a）、チョク・シヨク  
直・植（直 b）

例 2：ク/キュウ 区・駆（区）、九・究（九）、求・球（求）、級・吸（及）

## 7. 試用の結果と課題

上記のようにして、中国語母語話者（C、N1 レベル 4 名）が 152 字、非中国語母語話者（NC、N2 レベル 2 名）が 137 字の長短および入声由来の字音について学習した後、表 10、表 11 に示すように、N1・級外レベルの字と語例を中心とした事後テストを行い、何をヒントにしたか、誤った場合、どのように考えたかについて、個別にインタビューを行った（比率は概数）。出題した字には、学習した音符を含むが、字そのものは未習の可能性が高いもの（例：模倣の「倣」）のほか、学習していない音符だが、その音符を持つ他の漢字を知っていると思われるもの（例：「福祉」の「祉」。既知である「禁止」の「止」を音符に持つ）も含めた。

表 10：事後テストに使用した漢字のレベル

母語	級外	N1	N2N3 以下	字数
C	7%	78%	15%	60
NC	4%	71%	25%	48

表 11：事後テストに使用した語例の語彙レベル

母語	級外	N1	N2N3 以下
C	63%	28%	9%
NC	42%	31%	27%

まず、未知字音の長短のみから見ると、十分に効果が認められた（平均的な学習者 C1 の場合、正答 37、誤答 4）。次に、長短だけでなく字音全体で見ると、未知字音で正答が 3 人以上だった字に、次の下線の字がある。（模倣、風潮、自嘲、覆面、繁殖、誦念）これらは同形要素（方、朝など）とピンインをヒントにしたという。

一方、未知字音で 3 人以上が誤答だったのは、「紡績、地下茎、側溝、哺乳類、侍医、蜂蜜」で、原因は、同形要素に気づかず、ピンインに依存したことにあった。例えば、「地下茎」の場合、音符が共通の「經」でなく、ピンインが同じ jing1 である「京」からキョウ（1 名）、「精」からセイ（1 名）のように読んでいる。また、3 人が「侍」をシと読んだのはピンインの shi をそのまま当てはめたもので、音符「寺（ジ）」を共有する「時、持」には気づかなかった。これは、未知の字音は「ピンインが p、f、t、s、sh、k で始まれば、日本語は清音」だと判断しているためでもあることがインタビューからわかった。日本語の無声音を中国語の有気音と捉えることは入門期によく見られるが、それが修正されないまま、N1 レベルに達している学習者は決して少なくないようである。これらのことから、中国語字音から長短が判断できる場合でも、字音全体を正しく読むには、音符を見つけることが役立つと言えるだろう。

非中国語母語話者の場合、音符を発見することで「模倣、風潮、犠牲、枯渴、阻止、指摘」等が正しく読めた。一方、誤答の原因は、未習の同形要素が読めない（肢（支））、未習の同形要素で音符になるものが同定できない（飾（食））などであった。

音符同定への工夫とピンイン表記=清濁ではないことが認識できる教材が目下の課題である。

## 参考文献

- 天野成昭・近藤公久(1999・2000)『日本語の語彙特性』第 1・5・7 巻 三省堂
- 黒沢晶子(2011a)「中国語母語話者と入声音 - 『循環型社会をジゲンシ』とは? -」『日本語教育連絡会議論文集』23 号、137-145.
- 黒沢晶子(2011b)「中国語母語話者のための漢字音教材開発-入声音を含む漢語を中心に-」第 24 回日本語教育連絡会議 ブルガリア ソフィア大学
- 黒沢晶子(2012)「中国語母語話者のための漢字音教材開発-入声音を含む漢語を中心に-」日本語教育国際研究大会（名古屋）
- 黒沢晶子(2013)「漢字音教材開発-入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか-」『日本語教育方法研究会誌』20-1.
- 黒沢晶子（2014）「音符から見分ける漢字音」第 27 回 日本語教育連絡会議 ハンガリー バラトン湖畔
- 黒沢晶子(2015a)「漢字音教材開発-音符の活用-」『日本語教育方法研究会誌』22-1.
- 黒沢晶子（2015b）「日中漢字音対応の見取り図」第 28 回日本語教育連絡会議 ザグレブ大学
- 古藤友子（1987）「日中漢字音の対照」『日本語教育』62 号 pp.225-240.
- 佐藤進（2011）「日本語における音読みについて」『日本語学』30-3：4-17.

- 薛華民 (2013) 『中国語を第一言語とする日本語学習者のための漢字読み方指導法開発に向けた基礎研究—中国語(漢字)知識の利用をめぐる』九州大学博士論文
- 高松政雄 (1982) 『日本漢字音の研究』風間書房
- 藤堂明保 (1980a) 『中国語音韻論—その歴史的研究』光生館 (旧版: 1956 刊)
- 藤堂明保 (1980b) 「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社
- 徳弘康代 (2005) 「中上級学習者のための漢字語彙の選択とその提示法の研究—学習指標値の設定と概念地図作成の試み—」『日本語教育』127: 41-50.
- 徳弘康代 (2008) 『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』三省堂
- 中澤信幸 (2011) 「呉音について」『日本語学』30-3: 18-27.
- 中村雅之 (2005) 『音韻学入門—中古音篇』<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/oningaku.pdf>
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 沼本克明 (1986) 『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 橋本進吉 (1936/1950) 「国語音韻の変遷」『橋本進吉博士著作集 4 国語音韻の研究』51-103. 岩波書店
- 平山久雄 (1967) 「中古漢語の音韻」牛島徳次他編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店

#### 参考資料

- < 韻典網 > <http://ytenx.org/kyonh/> 2015 年 1 月 1 日～2016 年 1 月 23 日閲覧
- 『広韻』『中原音韻』等の韻書の検索ができる。声母、韻母の再構音一覧を付す。『広韻』のデータは、『宋本 広韻データ』に基づいている。
- 『宋本広韻データ』 <<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/index.html>> (2015 年 1 月 1 日～12 月 31 日 閲覧)
- 科研費 基盤研究 C 「次世代古典文献データベース構築の基礎的研究」 (平成 14～16 年度、課題番号: 14510494、研究代表者: 村越貴代美) による成果の一部
- 『中日辞典』依藤醇・小川文昭・三宅登之編 (2003) 北京商務印書館・小学館